

市教職員全員研修会

3月27日(月)にさざなみホールで市教職員全員研修会を開催しました。コロナの影響で保幼小中の教職員が集合形式で行うのは久しぶりでしたが、この期間も保育をしている就学前の教職員を除くと参加率は約87%でした。

○研究奨励事業の表彰

研究論文で奨励証を取られた先生方の表彰を行いました。校園に配付しました所報2022に研究論文が載っていますのでご覧ください。

【個人研究の部】

- 〈最優秀賞〉 上田 真理乃 先生 (野洲北中学校)
研究主題 「できた」、「わかった」を積み重ねる授業づくり
- 〈最優秀賞〉 藤内 典代 先生 (さくらばさまこども園)
研究主題 学びに向かう力を育むための保育を目指して
～非認知的能力の育ちを支える環境構成と援助～
- 〈優秀賞〉 坂本 侑希 先生 (篠原小学校)
研究主題 「主体的・対話的で深い学び」を目指した授業の創造
～伝え合いたくなる国語科の授業を通して、聞く力を育てる～
- 〈奨励賞〉 棚橋 良介 先生 (祇王小学校)
研究主題 思いを伝え合い、他者と関わる力の向上を目指した国語科
「話すこと・聞くこと」の授業づくり
- 〈奨励賞〉 森 渉太郎 先生 (祇王小学校)
研究主題 主体的に問いを設定、解決しようとする児童の育成
—社会科資料を通して—



【グループ研究の部】 なし



今年度、研究奨励事業への多くの応募をお待ちしています。

○小学校で起こった事案にかかる報告

メディアでも大きく取り上げられた事案でした。次の3つの視点で報告を行いました。

①事案の問題点、②事案から見てきたこと、③再発防止に向けて

①では、子どものマイナスイメージを投影したこと、子どもをけなしたこと、障がいに対する保護者の不安への配慮のなさが問題点となりました。

②では、保護者との連携、組織的な対応、障がい観が見えてきました。

③では、同僚性の構築、うまくいかない時・失敗した時の対応、人間力の向上が見えてきました。

教職員の労働環境の改善を進めていき、ゆとりをもって子どもたちと接することは重要な要素です。また、組織として、個人として自分たちの職場である園や学校が、子どもたちにとって安心して通える場になっているのかも一度見つめ直しましょう。同じような事案を起こさないよう、やらなければならないことを一人ひとりが考え、行動に移していかなければいけません。



○講演「コロナ禍を生きる子どもたちとの接し方について考える」

佛教大学副学長・教育学部教授の原清治先生による講演です。原先生は野洲市とのつながりも深く、コロナが広がる前には、園・校にも何度も来ていただいていた。今回の事案を受け、子どもたちの見方・接し方について話していただきました。

たくさんの方の教示いただきました。いくつか紹介します。

- ・コロナによるオンライン授業が一般化し、対面での授業を望まない学生が増えた。
- ・教職員間で自分たちのマスク着用について話し合う。
- ・対面するまでにネットによる人間関係ができあがっていることが多い。
- ・加害意識がなくても、ネットでは誰かが傷つく・炎上するように解釈の多様性が見られる。
- ・リーダー力がない子どもが、リーダーに選ばれる。不登校につながる要因。
- ・いじりがいじめの入り口。いじりを容認していたら先生・学校の責任。
- ・ディープアクティブラーニングになっていないと真の学ぶ力もコミュニケーション能力もつかない。質問の出ないプレゼンテーションはアクティブラーニングではない。教師が、学ぶ力向上のためにもディープアクティブラーニングとなる授業力をつけるべき。
- ・学力上位の子どもほど全方位型のプレッシャーを受けている。コロナで活躍する場がなくなってストレス過多に。自己肯定感が下がっている。
- ・「勤勉性」より「コミュニケーション能力」「経験の応用力」が社会での変容・移行には重要。
- ・先生も子どもも相性がある。昨年度の担任のタイプを知っておく必要がある。
- ・苦手な子どもや保護者を遠ざけない。
- ・オンライン活用により、児童生徒に個別最適な学びを提供できる。
- ・できない子がけなされたと感じないできた子へのほめ方の配慮が必要。一人の時にほめる。



教職員の皆さんの感想を一部紹介します。

- ・人を信じるのが、いかに大切であるかを今一度考えることができた。
- ・野洲にいる全教職員と一緒に聞くことができて本当によかった。自分ごととして一人一人が一つ一つやっていくことが大切だと思いました。
- ・今の子どもたちが抱える問題において自分とは違った感覚でいることが分かった。
- ・今までの常識や偏見・思い込みにとらわれず、目の前の子どもと向き合っていける柔軟で多角的な考えと態度を持ちたい。自分の価値観や考えを押し付けてはいけない。
- ・グサツときたり、耳が痛いと思ったりする話もあったが、人の話を聞いて吸収・変容できなければ成長はないと感じた。教師も子どもも同じだと思う。
- ・報告しないことが不都合なことを隠していると見られてしまう。職員間での共有が必要。
- ・楽しいコミュニケーションの取り方といじりとの境界が難しい。
- ・楽しい授業とは、授業内容についてのさまざまな意見が言え、子どもが考えたと感じられるものだ分かった。
- ・先生のキャラクターやクラスづくりでのいじりがクラスの雰囲気(風土)をつくってしまう。無意識にしていることも多い。慣れてしまうといじりが当たり前になってしまうことが怖い。
- ・「見えているのに見えないふりをする。」「問題を問題として対処しない。」ことが問題であり、即組織対応をしていきたい。
- ・子どもができないことに対して、自分の指導を振り返ることなく、特性という便利な言葉で片付けていたことがあり深く反省した。
- ・相性が良くなくても、苦手だと思っている子どもや保護者そして同僚にも、逃げずにこちらから声をかけて心を開く関わりをしていきたい。
- ・保護者や地域の方にももっと目を向け、学校での子どもの様子を通信やHPで伝えていく必要があると思う。

年度末の慌ただしい時期での教職員全員研修会となりましたが、なぜこの時期に全員で研修を受ける必要があったのかを一人一人がもう一度考え、肝に銘じて子どもたち、保護者・地域の皆さんと関わっていきましょう。